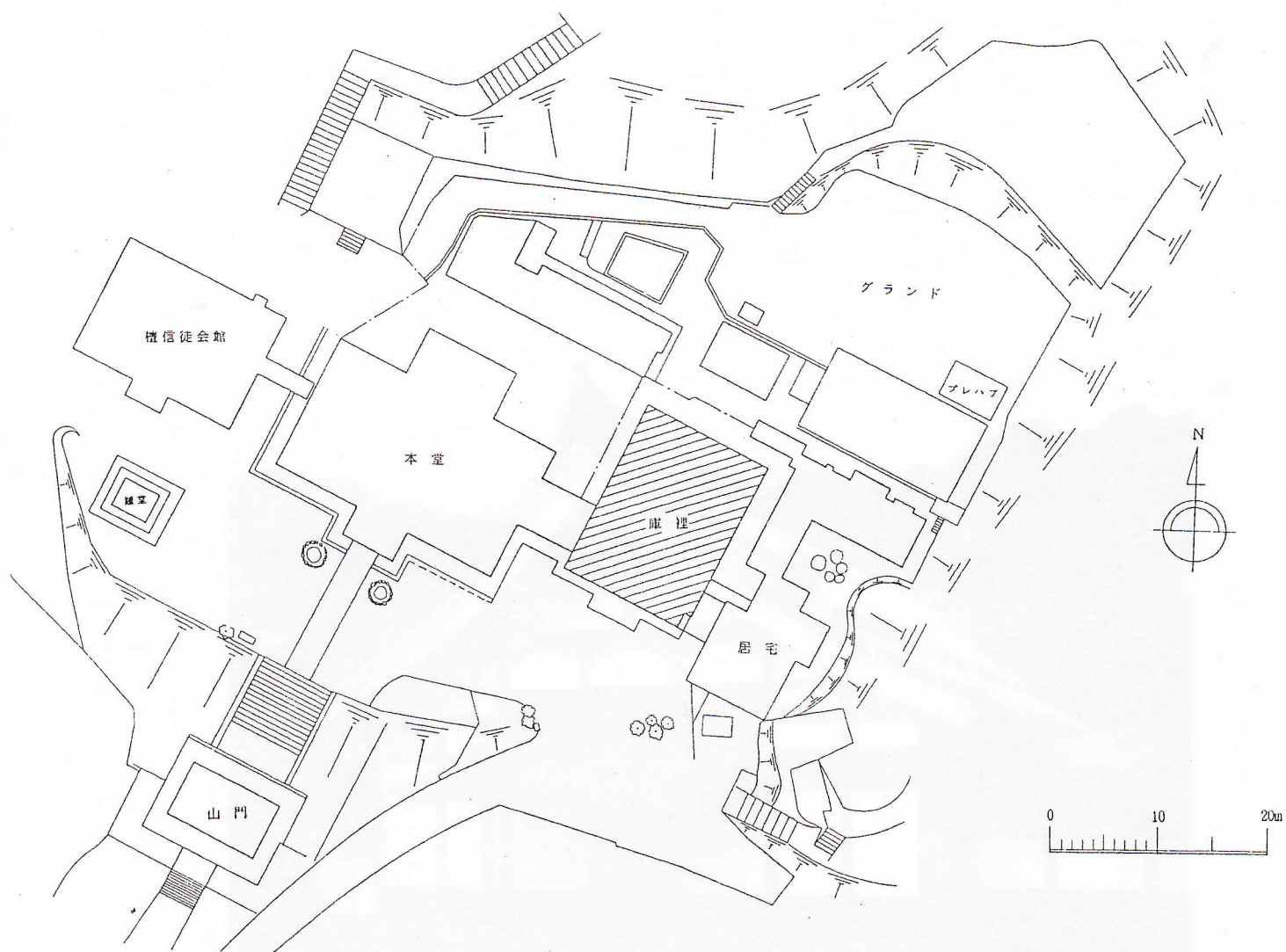


國前寺的由来（概略）



竣工 西正側面全影

(附録) 来由の寺範図



配置図

國前寺の縁起（概要）

國前寺は、暦応三年（1340）日蓮宗の僧日像が当地にて法華經に帰依した暁忍坊に出会い開いたものである。はじめ暁忍寺と称したが、江戸初期の明暦二年（1656）に、二代藩主浅野光晟室満姫（豊臣秀吉の姻戚に当る、法名・自昌院殿英心日妙）が菩提寺としたことから、寺名を現在の自昌山國前寺と改めた。

歴代住職は、現在までに三十八代を数え（別記）、同寺は安芸地方における日蓮宗寺院の中でも古い寺院として著名である。

なお、日像師は、日蓮宗の開祖日蓮の直弟子の一人として、若年にして嘱望され、日蓮臨終の際にとくに法華經の布教に専念するよう託された。そのために日像師は日本全国を行脚し、安芸国に来て、当時海岸にあった尾長山の麓の草庵に住む「暁忍」と会い、暁忍が法華經の信仰に帰依したことから本寺を開いたものである。

別添の「なみゆり」は、第七十四図は厂応三年（1340）、第七十八図は康永元年（1342）いずれも日像により書かれ、いまま國前寺に残るものである。なお、本寺にはいつの頃からか鳩摩羅什師の木像が所蔵されている。

國前寺は、日蓮以来の「不受不施」の信条を厳格に貫いたため、同様の考えの寺院とともに幕府から弾圧を受けた。そして前記自昌院等の庇護にかかわらず、遂に寺領没収となったが、信者等の強い支持のもと、明治維新まで、一部建物の縮少・撤去にはあったものの、生き延びてきた。

また1945年には、原爆により（2.6kmの距離）家屋が傾斜、尾根や庇の一部が吹き飛んだ。信徒の多くも被災したので、彼らの生活が漸く旧に復した被爆30年後になってはじめて、國前寺は寄付を募り、復旧に着手・完了した。1986年には、その建物は重要有形文化財の指定を受けている。

現在の寺地は、広島駅北口より北東約600mに位置し、広島市街を一望する東区山根町の尾長山の尾根を削り取った大地に南面し、約8000坪（25,000m²）の寺域を構えている。

國前寺歷代住持

<歷代住持>		<遷 化>	
開 山	日 像	康永元年	(1342)
二 代	曉 忍	文和3年	(1354)
三 代	妙 実	貞治3年	(1364)
四 代	妙 全	永徳3年	(1383)
五 代	日 巖	応永21年	(1414)
六 代	日 忠	永享3年	(1431)
七 代	日 慈	宝徳2年	(1450)
八 代	日 久	寛正3年	(1462)
九 代	日 賢	文明10年	(1478)
十 代	日 淵	文亀3年	(1503)
十一代	日 正	永正12年	(1515)
十二代	日 執	天文元年	(1532)
十三代	日 在	天文7年	(1538)
十四代	日 梁	永禄3年	(1560)
十五代	日 教	天正元年	(1573)
十六代	日 永	文禄3年	(1594)
十七代	日 音	元和8年	(1622)
十八代	日 達	万治4年	(1661)
十九代	日 珠	万治4年	(1661)
二十代	日 勝	貞享3年	(1686)
二十一代	日 迫	元禄10年	(1697)
二十二代	日 憲	元禄10年	(1697)
二十三代	日 眼	元禄14年	(1701)
二十四代	日 啓	元文元年	(1736)
二十五代	日 衍	寛保2年	(1742)
二十六代	日 禎	安永4年	(1775)
二十七代	日 報	明和2年	(1765)
二十八代	日 演	寛政6年	(1794)
二十九代	日 遵	享和2年	(1802)
三十 代	日 閑	文化6年	(1809)
三十一代	日 徴	文政2年	(1819)
三十二代	日 等	文化13年	(1816)
三十三代	日 相	弘化元年	(1844)
三十四代	日 禪	慶応2年	(1866)
三十五代	日 静	文久2年	(1862)
三十六代	日 昇	明治31年	(1898)
三十七代	日 秀	昭和13年	(1938)
三十八代	日 華	現 在	

第七十四図 (なみゆり) 御年七十二歳

授与之暁忍

广應三年十二月 (二三四〇年)



広島市山根町

本山

自昌山 国前寺 宝蔵

本紙 二八・五×七・六 cm

第七十八図 (なみゆり) 御年七十四歳

授与之曉忍寺(国前寺旧名)

康永元年^{壬午}七月一日 (一三四二年)



広島市山根町

本山

自昌山 国前寺 宝蔵

本紙 六六・〇×四〇・〇 cm



自昌院（満姫）とその背景

